

ア人は捕虜をトコトンまで酷使して、最後には銃殺するつもりであろうという潜在意識が、私の脳裏にしみ込んでいたのである。

捕虜の待遇や、取り扱い規定の国際条約等の高度の知識は当時の私（二十歳）には微塵もなかった。

二日目からはソ連人の監督と将校、日本の将校が一同となって、捕虜に作業を強制した。作業能率の上からない者には食事を減量した。作業拒否者は監獄に入れた。逃亡兵は銃殺した。こうして、廃墟と化した収容所は建設されていった。

昭和二十年九月ころから翌年二月ころまでが犠牲者の多く出た時期だ。このころの犠牲者の多くは氏名不詳者が多い。ソ満国境やシベリアの原野に捨てられて、無縁仏になっているのではないだろうか。

当時は日ソ両軍は互いに言葉が通じなかった。敵対意識が激しく、憎悪し合っていた。日本兵同士でさえ、名前を知らない者が同居していた。私の見てきた死者のすべてが氏名不詳の無縁仏であった。

シベリア抑留体験記

岩手県 菅原 春一

私は、昭和十八年九月十三日に弘前留守部隊に召集され、弘前の営庭において部隊編成され、三興丸という貨物船に乗船いたし、北海道小樽港に上陸し、妙国寺に約一週間ほど滞在し、再度乗船し北方に向かって進んでいきました。我ら兵隊には任務や行き先が全く不明でありました。途中いつ沈没するかわかりません。我ら指揮官中川勇中佐は自ら甲板に登り、いつ敵に攻撃を受け戦死するかわからないから出陣の祝いをせよと言つて、たる酒を全員で頂戴いたしました。途中択捉島に寄港し、さらに北進いたし、着いたところは無捍島という小さい島で、大阪の裏野中佐一個大隊が警備に当たっておりました。我が部隊は上陸後毎日揚陸作業、道路構築、兵舎建設、陣地構築工事に一生懸命頑張りました。十月一日に上陸し、間もなく雪が降り、

寒さも非常に厳しくなり、苦勞の連日でした。やがて十九年の春がきたが五、六月は毎日濃霧で泣かされました。だが、二十年八月十五日まで約二か年間、敵が一度も攻撃してきませんでしたので、命拾いができたことと思います。終戦後、八月三十日早朝にソ連人が上陸開始して武装解除となり、シベリア抑留となりました。東雲原飛行場に全武器弾薬を集積し、毎日ソ連の使役作業に当たり九月上旬に北海道に上陸することので、貨物船に持てるだけのものをたくさん持つて乗船し、ミシマ湾を出港し、数日後着いたところはソ連領の港に上陸して、今度は冷凍車に一個中隊の割で乗車させられました。排せつ等は空き缶にて用便をし、小さい窓から投げ捨てるのでした。途中汽車が停まるとソ連軍が来て我らの食糧や物資を奪っていきました。九月二十日ごろ着いたところは、山の中の電気も明かりもない粗末な建物に一個大隊一千人が収容させられました。翌朝起きて見たら、真っ白な霜が落ちておりました。

それから直ちに部隊組織がなされ、大隊長渋谷大尉、

中隊長は福士中尉、小隊長は不明、私は第四分隊長を命ぜられました。その後は毎日鉄道作業に狩り出されました。

日一日ごとに寒くなり、まき用の伐採作業もやりました。どのような作業にもノルマがあり、そのノルマが完成できないと食事が少なくされるのです。作業用の器材も日本のものと比較にならないほど不良品でした。朝の暗いうちから夕方暗くなるまで働いてもノルマは完成できないのです。体は日を増すごとにやせ衰えて最後には病人となり、高熱がなければ休むことができない。また、薬もないので死亡する戦友ができるのです。その死体は雪の中に埋めるだけです。こうしたことが次々と繰り返されるのです。

二年目あたりから戦友同士がちよつとのすきに食事を盗むようになり、とても油断ができなくなりました。また、ある将校は自分の当番兵の食事を取り上げ二人分食べておりました。また将校が、兵隊がソ連人と時計や万年筆、鉛筆、入れ歯等をパンと交換するので困るというので帰国するときまで預かっておくと言っ

て、取り上げておりました。ところが、預かった兵隊が外の分所に行くことになり、小隊長に申し出て返してくださいと言ったところが、小隊長の話は、作業に出た後にソ連兵に取られたとのことで返してくれなかったもので、そのことをソ連兵の上官に話したら、取り調べの結果、そんなことはないというので、小隊長に話したら、自分がソ連人とひそかにパンと交換して食べておったので、それがきっかけで兵隊と将校と大喧嘩が始まりましたので、ソ連軍の上官が兵隊と将校を分離したのです。

それ以前から将校たちが兵隊の食糧を上げねして食っていたことも明らかになりました。

やがて兵隊同士で運営が始まり、前より暮らしがよくなり、三年目を迎えるところに共産党活動が始まり、最初のうちは、一部の者が活動を行っていたのですが、月日がたつにつれますます激しくなり、共産党活動に参加しない兵隊は帰国をさせないというので全員参加するようになり、でも中には不活動な者がいるので、その兵隊を作業終了後大衆カンパにかけてたたくので

す。こういうことが毎日のようになったので、日本人同士のにらみ合いが始まるようになったのです。

毎日の作業が激しくなり、手も足や顔などはもちろん体は一度も洗ったことなどだれもありません。そのため、体全身にシラミがたかりだしました。そのためソ連側は全兵隊の頭から脇の下などの毛を一丁のかみそりで水をつけてそり落としました。また南京虫にも大変悩まされました。兵隊全員真っ黒な顔しているのだから見分けがつきませんでした。入ソ半年あたりから二年半近くまでは最も苦しんだころでした。三年目近くなつてから、共産党活動が行きわたり、日増しに収容所生活も明るくなり所内でいろいろ行事が始まり、演芸会等ができるようになり、また週一回ほど入浴ができるようになり、洗濯などもでき、体も全部きれいになりました。それでも食糧はよくならず、馬糞や牛の糞等も食べました。何か路上に食べる物がないかと全員下の方ばかり見るようになり、食べられる草や木の芽等で腹の足しにしたのです。特にアカザやハコベ等は常食になりました。ビタミンが不足のためか

ら、落葉松の葉をお湯の中に入れて飲ませられました。

あるときに非常に寒い朝でしたので、たき火をしたくとも、火種になるものは何ひとつないので困っていたら、一人の兵隊が自分の作業服を破って綿を取り出して、どこから見つけて来たのか二枚の板切れを持ってきて、その綿を板で摩擦をして口元に持っていき吹いたその綿が火を吹き出したので、それと一同が枯れ草や枯れ木を集めてたき火をしていたら、監視兵が来て怒り出し、各自の身体検査をしたが、だれも火種を持っている兵隊がおりませんので、監視兵がだれが火をつけたと怒りましたので、その兵隊が名乗り出たら、どうして火を燃やしたというので、その兵隊が説明をしたら、監視兵が驚いて、日本の兵隊は頭がいいといつて褒めてくれました。自分もオーチンハラショウと言つて皆と一緒に暖まるのでした。その勇気のある兵隊のお蔭であつたまることができました。

いよいよ帰国命令が出て、船中でオルグと兵隊の格闘が起きました。私も二十四年八月初旬に帰国者の仲間になり、ナホトカに到着し一週間ほど共産党教育

を受け、やがて日本船に乗船し舞鶴港に上陸しました。

このときの気持ちは口や筆では表せません。そして身体検査や消毒等を受け、一週間ほど米人の検問や検査を無事に終わり列車に乗ることができ、舞鶴で千円のお金を頂戴しました。私は釜石製作所に働いておりましたので、製鉄所職員から「光」煙草一個頂戴いたしました。我が家に落ち着き製鉄所に帰国の挨拶にまいりました。そのとき皆様方から共産党活動はやらないように言われたのです。我が家に帰つて数日後、製鉄所病院で身体検査並びに復職手続き等を行いました。後日通知をするからそれまで自宅で待機するように言われました。数日後、通知書がまいりました。開けて見てびっくりいたしました。身体検査の結果は異常はなかったが、体重が少し減っていただけでした。原因は共産党ということで復員者全員首切りになりました。

私は十九歳から働いておりましたので少しばかり退職金を頂戴し、その後はシベリア帰りということで就職はできず、村の駐在所から数年間注目されました。

また、十八年の召集になったとき耕地を近所の人に貸して出征しました。妻子は妻の生家に頼み面倒をみていただきました。そのとき耕地を貸すときの約束に、万が一に無事に帰ったときはいつでもすぐに返してくれる約束でしたが、四年間のシベリア抑留中に農地法という法律ができたのでただでは返すことができないとのことでした。帰国して喜んだのも束の間でした。職を探しても職はなく、山中に入ってまき切りや土工作業で生活をしてまいりました。幸い私は健康で働きましたが、妻が体が弱くて苦勞の種でした。

ナホトカの汀に立ちて

北海道 塚本光雄

収容所の思い出

一、サボタージュ

「なあおい、働いてもサボっても同じ五合のかゆじやないか。こんな調子で働かされちゃ体が二つあって

も、二度と女房の顔も拝めないで態よくお陀仏だぜ、こうなったらとにかく要領よくまわらなくっちゃあな」と、ひそひそ話し合い、団体作業の中であつて、歩哨の目を盗み監督の目をごまかして、果ては我々一同の迷惑も考えずに、彼らはたき火にばかりかじりついて、いわばグループの厄介者となつて得々としていた連中がどこの組にも二、三人はいたものであるが、やがてこの山奥の収容所にも春の陽光が訪れると、彼らの思惑とは反対に、いつしか彼ら自身がシベリアほけという妙な趣向にとりつかれて、比較的容易な作業の場合でも怪我をしたり、または命を落とすような羽目に至つた場合が少なくなつたのである。

これに引きかえ、団体構成の主要メンバーとして、終始一同の矢面に立ち、ユーモアの一つも飛ばしながら率先危ない仕事や苦しい労働を引き受け、シベリア特有の寒風の中、台車の上に登つてトビや鉄棒や一本での芸当的作業に従事してくれた人たちがいたのである。いつ丸太の下敷きになるかと思われる危ない作業に従事して、彼らの口をして言わしめれば、「はき捨